

農業集落に関する分析から

農業・農村構造プロジェクト センサス分析チーム

農業集落による地域資源の保全率は10世帯を下回ると急激に低下

2015年の全国の農業集落数は138,256集落で、2010年よりも▲0.7%の減少となりました。農業集落数はこれまで農家数などに比べるとさほど減少してはならず、農業集落には人口や世帯数の減少に対する一定の「強靱性」が認められてきました。他方、農業集落の今後の見通しに関しては、更なる人口減少と高齢化による「農業集落の限界化」が進むことから、多くの集落が消滅するのではないかという意味での「脆弱性」も懸念されます。

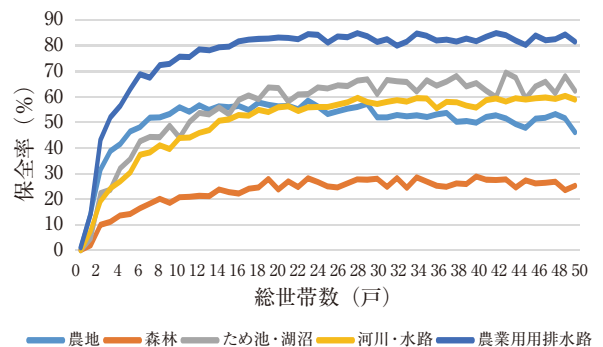
この農業集落の「脆弱性」を第1図により、農業集落の「地域資源の保全率（地域資源を保全している集落数 ÷ 地域資源がある集落数）」と集落規模（総世帯数）で関係を確認します。総世帯数が10戸を割り込むあたりから、地域資源の保全率は急激に低下していることがわかります。総世帯数10戸という「臨界点」を一旦割り込んだ農業集落では、地域資源を保全する機能が急激かつ全面的に脆弱化しています。近年中山間地域の中でもとりわけ生産条件と生活条件が不利な場所を中心に、集落規模の縮小が加速化しています。そのため局所的ではあるものの、複数集落が同時多発的に機能不全に陥る「総崩れ」の事態が発生するリスクは、今後10～20年間で確実に高まっていくと想定されます。

「活性化のための活動」は活動内容によって違いが大きい

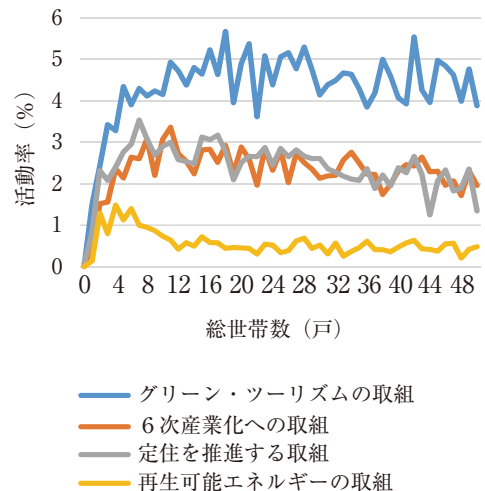
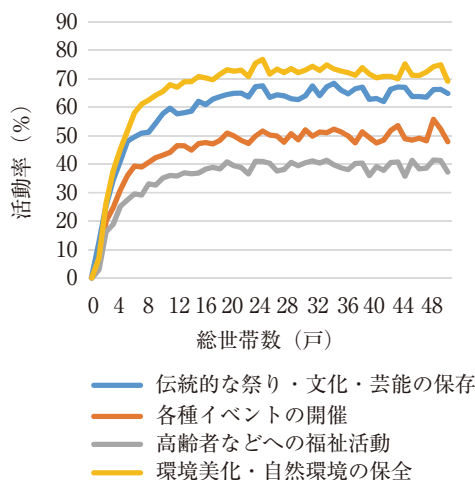
2015年農業センサスで新たに調査された項目の1つとして、農業集落による「活性化のための活動状況」があります。ここで「活性化のための活動」を「攻め」と「守り」に分類します。「攻め」の活動は、「グリーン・ツーリズムの取組」、「6次産業化への取組」、「定住を推進する取組」、「再生可能エネルギーの取組」とします。これらは集落の衰退に歯止めをかけるための取組といえます。他方、「守り」の活動は「伝統的な祭り・文化・芸能の保存」、「各種イベントの開催」、「高齢者などへの福祉活動」、「環境美化・自然環境の保全」とします。これらは集落の衰退に対応するための取組といえます。

「守り」の活動は「伝統的な祭り・文化・芸能の保存」、「各種イベントの開催」、「高齢者などへの福祉活動」、「環境美化・自然環境の保全」とします。これらは集落の衰退に対応するための取組といえます。

第2図によると、「攻め」の活動の活動率は、「守り」に比べて率自体がかなり低く、集落規模との関係も弱くなっています。また、「守り」の活動の「活動率（活動を実施している集落数 ÷ 全集落数）」は集落の総世帯数が10戸未満になると、規模が小さいほど急激に低下します。こうした「攻め」と「守り」の活動率の違いは、「守り」の活動が原則全戸参加で取り組まれることが多いのに対して、「攻め」の活動は一部の住民有志らが自主的に取り組んでいることが多いことなどを反映していると考えられます。他方、「攻め」の活動の活動率は寄り合いの開催回数が多いほど上昇する傾向もあることから、「攻め」の取組によって農業集落の「結束力」が高まり、「守り」の活動が強化され、地域社会の維持に貢献することが期待できます。（福田竜一）



第1図 集落の規模と地域資源の保全率
資料：2015年農業センサス。



第2図 集落の規模と活性化のための活動（左：「守り」の活動，右：「攻め」の活動）
資料：2015年農業センサス。